

# 文献からみた加耶と倭の鉄

## The Iron Materials between Gaya and Wa Viewed from the Documents

鈴木靖民

① 弁韓諸国と対外関係

② 加耶の発展と倭国

結びにかえて—6世紀の加耶の滅亡

### 【論文要旨】

『魏志』韓伝に引く「魏略」の1世紀後半、辰韓で採木労働に従う漢人の説話は鉄の採掘・鍛冶生産を示唆する。ついで、3世紀の韓では首長層のほか、多数の住民である下戸たちによる魏との多面的な交易が行われた。弁韓では鉄を産し、それを韓・濊・倭が取り、また楽浪・帯方二郡に供給したが、交易には外交・軍事上の意味もあり、鉄加工技術や消費先を確保できる公権力や首長層が関与した。倭の交易主体は倭王や首長であるが、実際の荷担者は倭人伝に見える対馬・一支の「船に乗り南北を市糶する」交易集団と同類の人々である。

この鉄の取戻と再分配・互酬により弁韓中枢の狗邪韓国（任那加羅）の首長層が諸韓国のネットワークをつくり、さらには流通機構センターと化し、4世紀以降も鉄をはじめ、陶質土器・甲冑・馬匹などの多彩な文化と、諸民族集団の行き交う東アジア有数の広域流通の中心地として展開する。

2世紀末頃の倭国の乱は鉄素材・鉄製品の輸入ルートをめぐる西日本の首長同士の争いである。楽浪や諸韓国との交流により社会の階層化を進める北部九州の首長たちに対する、山陰・瀬戸内沿岸・近畿の後発的な社会の首長の戦いであり、その結果、後者が鉄の流通と技術移転を通じて優位に立つ。こうして成立した倭の王権は鉄・金属資源と渡来人の受容・管理・分配の繰り返しにより、各地首長層との結合が維持されるが、それが王権のファンダメンタルズを強く規定するのである。同じ頃、弁韓でも鉄の入手をめぐる覇権争いが起こり、抗争の解決策として、外来王的な辰王が推戴された。弁韓の鉄の争いが倭に影響を及ぼしたのであろう。それ以後、4世紀後半から5世紀にかけて、朝鮮半島での戦争を含む情勢下であって、倭王権は危機にさらされる加耶・百済に加担する国際路線を絶えず継承することになる。だが、5世紀末6世紀初めに日本列島で鉄精錬が可能になると、倭と加耶、加耶と新羅の関係、ひいては東アジアの諸関係も大きく変化するのである。

## ①……………弁韓諸国と対外関係

### 1 1世紀の韓と鉄

『後漢書』韓伝には、紀元44年、韓の廉斯の人蘇馬謨らが楽浪郡（紀元前108年設置）に朝貢し、光武帝から「韓の廉斯の邑君」に冊封されて服属した。以後季節ごとに朝貢するとある。一世紀前半、韓のなかでの外交を行う地域首長とその下にある社会の出現を物語る。朝貢外交には朝貢品としての交易物をとともなうものであり、その社会はそれを生産し流通させることを可能にする身分社会・階層社会の成立を前提とする。

『魏志』韓伝によると、後漢の桓帝・靈帝（147～189年）末期、韓・濊が強盛になり、楽浪郡の漢人が韓・濊に移住する。その後、遼東の公孫氏が帯方郡を設置して（204年頃）、倭・韓が服属し、朝貢したという。この倭・韓は漠然とした表現であるが、同書の伝（条）の名との対応に表れるように、それぞれに属する諸国を包摂して他と区別する政治的、社会的、民族的総称である。やがて230年代、魏が駆逐した公孫氏に代わって楽浪・帯方二郡を定める。

時代をやや遡ると、同書に引く「魏略」には、新の王莽の時（20～22年）、同じく廉斯の鎬が楽浪郡へ降伏する途中、材木の伐採作業を強いられる漢人の捕虜で奴となった千五百人に出会って、彼らを救出する説話が見られる。廉斯は辰韓の一地域と見なされており、鎬はその支配者、つまり最上位の有力首長に属するであろう。

魚豢の「魏略」は『魏志』の編纂時と余り差がない265年（泰始元年）か、270～80年に成立したとされるので、その頃の伝承などを採録したのであろう。これは飽くまで説話であろうが、史実を探る手がかりとしたい〔鈴木1995〕。

この採木は製鉄のために供される木炭用ではないかとされている。そうであれば、朝鮮半島東南の廉斯から遙か西北に位置する楽浪郡に通じるルート沿いのどこかに鉄鉱山があったのである。鎬の働きかけで、漢人を使役していた辰韓の首長は解放の際に賠償として楽浪郡に一万五千人と「弁韓の布」を提出し、鎬は郡から衣冠・田宅を賜ったという。これは韓の有力者の楽浪郡への服属説話でもであると解されるが、辰韓はその南隣の弁韓との間に、すでに交易・流通を行っていたことが示される。そして廉斯から楽浪郡へ送られる朝貢品のなかには、鉄と布があったことも類推できる。したがって布は弁韓からの中継交易の品ということになる。『魏志』韓伝弁辰条によると、弁辰（弁韓）の特産として養蚕のできる縑布、いわゆるカトリギヌを作ることが挙げられているので、この種の布であろうか。<sup>(1)</sup>

辰韓ではある地域の首長層の管理下に木材の伐採・製炭・運搬が行われ、それは鉄鉱石の採掘・運搬、製鍛・鍛冶生産に結びつくものであった。しかも説話には、鎬と採木に従事する集団のリーダーと目される人物の戸来との遣り取りを記しているので、同様に楽浪系の漢人の技術を利用した鉄の生産・流通に従事する専門集団がほかにもあったことが考えられる。彼らは後にいう身分では下戸に相当すると思われる。なお朝鮮半島南部（弁韓・加耶）での鉄生産の開始については、大体、木槨墓の出現する1世紀末～2世紀であるとされる〔孫明助1998・2003、東1999、佐々木編2002〕。

## 2 3世紀の韓の首長・下戸と対魏外交（交易）

周知のことであるが、『魏志』韓伝の弁辰（弁韓）条によれば、弁辰には十二国あり、ほかに諸々の小別邑があった。その社会は、辰王が弁辰十二国の王として馬韓の月支国に治しており、王位は馬韓人が「世々相継ぎ」「自らでは王為り得な」かった。彼は馬韓、あるいは弁辰諸国の首長たちの支援・擁立によって就いたきわめて他律的な外来の王である。彼は魏の楽浪・帯方二郡との外交に当たり、魏から率善・邑君・婦義侯・中郎将・都尉・伯長の号を授けられて受容し、それを「官」として用い、弁辰の首長層のランク付けと社会の秩序形成に転化させていた。辰王はその外交と再分配行為によって、首長層と社会の頂点に位置したのである。辰王は専ら魏との外交の主体者であるが、同時に交易をともなった可能性が高いものの、詳細は不明とせざるをえない。

より明確なのは、弁辰を含むであろう韓の首長のランクと彼らが主導する外交・交易活動である。韓の渠帥、つまり首長には大小があり、その最大の臣智は魏と交流して「邑君」の印綬を加授され、衣冠を与えられた。特産の朝貢品、すなわち主要な交易物は後述のように鉄であると推測される。臣智とは皇帝の臣下の意味の臣にプラスして尊称語尾の *tsi* を表す智の字を加えたことが明らかにされている。臣智には称号自体に対外的性格が込められているのである。ついで險側・婁濊・殺奚・邑借という、韓語の尊称を漢字によって表記される各種首長層が存在した。彼らも同じく魏との外交を続け、「邑長」の号を授けられた。こうした諸々の地域首長と彼らに代表される社会は弁辰二十四国ともいわれ、半路国・狗邪国（狗邪韓国）・安邪国・浣盧国・斯盧国等々、後の加耶・新羅としてまとまる地域に広範に分布していた。

さらに韓伝で注目されるのは、ほかに下戸、「千有余人」が帯方郡へ朝貢し、印綬・衣冠を自ら服用して認められていたとある点である。下戸は『魏志』の東アジア社会の諸族に見られる一般住民を指す。したがって韓における魏との外交・交易は、諸国にいたという王のみが管理・独占する形態ではなく、上述した臣智以下の首長層以外にも、下戸の多数の人々という二つの系列によって担われ、その上もし辰王の外交にも伴うとすれば、併せて交易主体には三つの系列があって行われたことになる [鈴木 2002a]。

臣智以下の首長層による外交・交易は、王を核とする諸国の王権ないし公権力に包摂されると見られる。したがってそれは畢竟、王の管理・独占下に集約されるものか、あるいは王権内にあっても臣智以下の独自の活動であったか、両方の可能性があるが、それは王と多分彼に準じた地位にある臣智以下の層との人格的、政治的関係の如何によって決定される性格のものであろう。

こうしたほかに類のない多面的な交易については、魏が韓社会の住民を懐柔して、二郡に近接する韓の自立的な政治統合を阻む政策であったとする意見がある [李成市 2001]。

## 3 弁辰の鉄生産と交易

有名な『魏志』韓伝の弁辰条の鉄の記事は、つぎのようにある。

弁辰では国に鉄を出し、韓・濊・倭がみな従ってこれを取っている。およそ市で買い物をするにはみな鉄を用い、中国で錢を用いるのと同じである。また鉄を楽浪・帯方「二郡」に「供給」している。

『魏志』韓伝の記事を承けた『後漢書』韓伝では韓を馬韓と解釈し、貿易には鉄をもって貨とす

ると記す。

弁辰の社会は、土地が肥沃で五穀・稲の栽培、養蚕・織布などの農桑や織物生産が社会の基盤をなしていた。これは倭人伝の倭国の場合とほぼ共通している。ところが弁辰では鉄が特産物・交易品として特記される。その産地は記事による特定ができないが、4世紀代の加耶・新羅をも含めて洛東江流域と見なされている。この鉄生産をめぐる考古学的研究では、ここでいう鉄が鉄鉱石か、鉄の鑄塊、すなわち半精製・未精製の塊状素材か、それとも斧形鉄板などの板状鉄製品、韓国や日本の古墳で出土し『日本書紀』神功皇后四十六年条などの文献にいう鉄鋌に当たるか、議論が分かっている。おおかたは、それが中間素材で、実物貨幣として交換価値の高い交易品とすることで一致している。

諸韓国の王(辰王以外)・首長を頂点とする階層社会にあつては、首長の秩序による生産の統制・管理・分配が考えられ、鉄についても当てはまる。

弁辰条には、韓・濊・倭の採鉄と「二郡」への供給との別を記すが、鉄の形状・質、交易形態などの違いの有無は明らかでない。

鉄の生産は当然ながら専門的技術を有する人々が従事したであろう。後に日本でいう韓鍛冶集団の遠い前身であり、首長層により編成・統率されたであろう。鉄の交易・流通の荷担者には、①生産主体と同じなら弁辰の首長層である臣智以下、②首長層と関係をもち、交易・分配の対象でもある、直接生産者周辺の輸送に当たる多数の人々、すなわち下戸層が想定される。

『魏志』高句麗伝には、国中の「大家」のため下戸が「遠く米糧・魚・塩を担いてこれに供給すると、遠距離交易の様子を記す。即物的には海と山・内陸の物資の交換を意味するが、大家は支配者たる首長層と解され、彼らに対する下戸の「供給」という関係が浮かび上がってくる。この関係が類推の参考になるであろう。また東沃沮伝には、「貂の布、魚・塩・海中の食物、千里担負してこれを致す」とあり、東沃沮から臣属する西隣の高句麗への特産物や貂からの中継品の貢納を述べるが、単なる「租税」でなく回賜品があったと想定すると、これもまた同様の遠距離交易にほかならない。

①は王に連なり王権にかかわる支配層であり、②は本源的な生産・交易活動として、物資の交換、経済活動に従事する専門的輸送・交易集団であるかと思なされる。ここに王・首長の権力構造や流通機構のもとに一元的に組織化されない韓独特の階層社会、生産・流通のありかたが認められる。魏はむしろ意図的にこの実態を容認し、利用したのかも知れない。

弁辰条にいう鉄の交易の相手は諸韓(馬韓・弁辰)、北の濊、南の倭であるが、その入手後を考えて、加工技術や消費の体制を用意できる首長層、または王権などの公権力が関与したものに違いない。

倭との関係には、海を越えて弁辰との間を往来する日本列島の倭人の海上輸送・交易輸送集団も存在したとして不自然でない。弁韓(弁辰)地域出土の倭系遺物にも知られる通り、彼らは韓の地に長期滞在する場合もあったであろう。憶測であるが、その存在は生産に関与せず外部の制度や物資・文化を戦略的に採用し、それをもってその内部社会に一定の役割を確保するミドルマンの概念に相当するのではなからうか[前川1998]。彼らは倭人伝の対馬・一支に見える「船に乗り南北を市糶する」交易集団と重なり合う。その身分・階層は倭人伝にも認められる下戸層に当たると思われ

る。魏との多元的な外交・交易から推して、まず下戸層たち独自での完結する活動が想定される。その場合にも各地域の首長の介入や統制が否定されるものではない。だがそうでなく、鉄に関しては倭人伝が伝える倭王、その側近の外交や市をつかさどる大夫・都市の類型の地位にあるものが最上位にあって管理・統制する場合もあったとすれば、韓でも同様に臣智以下の関与が考慮される。

ともかく、考古学の成果によると、倭での鉄、鉄製品の受容は当初は首長層の交易のための実物貨幣としてであり、もたらされた鉄器はそのまま農工具・武器として使われたであろうが、再加工のための鍛冶技術は容易にえられなかったはずである。やがて鉄は生活必需財としての武器・武具・馬具・農具・工具などを製作するための材料として重要性を増すに及ぶ。この間に、倭では各器種、各地域による違いを孕みながらも鍛冶炉をはじめとする製鉄技術や施設を技術者と相まって獲得すると考えられるが、それが特化して分業化し、近畿などに大規模な渡来人専門集団が出現するのは5世紀以降のこととされる〔花田2002〕。

一方、弁辰と「二郡」の鉄の交易は、楽浪郡が資源と生産を開発し、それゆえプライオリティを持っており、一定の規制が働いていたとする考えがある。魏の郡と弁辰の政治的関係はつまびらかでなく、そうした蓋然性は強いかもしれないが、前記の「魏略」の説話では漢人を辰韓人が使役して製炭、製鉄を行っていたことが示唆される。楽浪郡の規制の如何と韓における生産現場での漢人の技術や労働の有無とは必ずしも連動しなくてもよいが、漢人や楽浪郡からの技術移転は考えに入れるべきである。もちろん漢人であれば誰でも製鉄技術を有するとは限らない。

少なくともこの鉄の交易は朝貢貿易の形態を取り、楽浪郡と韓の首長層との上下関係において鉄の交易が成立していた確率が高い。「二郡」からの見返りと称すべき回賜品には鉄器文化をはじめ多くの漢の先進文物が含まれており、それには皇帝からの官爵の授与に表れる軍事上、外交上の保障があったことは疑いない。

二郡滅亡（313年頃）後、韓（加耶）の鉄の交易は続いたであろうが、金海など加耶南部での鉄器の集中化と倭系遺物の出土から見て、既存の流通ルートに代わる日本列島への新ルートが開発されたと推定されている。その主対象は倭国の王権の首長たちに向けられたと考えてよい。

こうして、鉄の取収と再分配・互酬を取り仕切る韓の首長たち、とりわけ主産地もしくは流通・出荷の集中地点と目される弁韓の中核、狗邪韓国（任那加羅）の首長たちとその下の集団は、物的、人的流通機構のセンターと化し、諸韓国のなかで抜きん出ることになる。

#### 4 倭と洛陽・帯方の間の弁韓

『魏志』倭人伝の帯方郡から邪馬台国への行程記事は、その内容上、諸韓国と倭の関係記事でもあり、この地域の交流や交易を考えるための格好の史料である。倭人伝は帯方郡より倭までの朝鮮半島西岸から南下して西南から東南に至る海上交通路を描いており、これは往来する公的使者のルートであるが、使者以下が朝貢品を携える姿からは当然、交易ルートの一つでもあることを推測させる。これはさらに北上して遼東にも通じるルートである。

帯方郡からは諸韓国—狗邪韓国—対馬国—支国—末盧国—伊都国と通って倭国の地、日本列島に上陸する。倭王の遣使は「京都（洛陽）・帯方郡・諸韓国に詣る」とあるので、帯方郡との間には同一の海上を航行するルートを取る。

郡使は糸島半島の付け根あたりの港湾かと思われる伊都国の津で、文書（詔書・檄・印綬）・賜遺物（錦・毛氈・絹・刀・鏡・真珠・金・鉛丹など）を伝送することになっていた。郡の使者もここまで来て駐在していたようである。

この津については、半両・貨泉・銅鏡片を出土した福岡県志摩町の御床遺跡かとされる。また郡使の留まった候補地には、楽浪系土器が出土した前原市三雲番上遺跡が挙げられている<sup>(2)</sup>。

つまり伊都国の地には倭国の外交・交易機構が設けられた。その管掌者は不明であるが、その候補として諸国の檢察をつかさどり、刺史のようであるとされる一大率か、交易を監督する大倭か、伊都国の王か、伊都国の爾支などの「官」が挙げられる。この津は経済人類学で説かれる「交易港」の様相を呈している。物資の集散地、物資の収納・支出、会計、警備などの管理、内外の市などへの分配、紛争の調停、外部との渉外、通訳、饗宴の設営、船舶などの建造・修理などが行われたであろう。そうであれば、津での交易や移動する人々の社会秩序を維持すべき支配者の現われる必要がある。ともかく、彼らは倭王とその配下となる人たちであると想定される。

239（景初三）～247年（正始八年）、魏の公孫氏駆逐を契機にして行われた倭王の帯方郡・洛陽との外交は、生口（人）・布製品・錦・白珠（真珠）・青大勾珠（青玉）などの特産物を献上し、代わりに各種の高級品を回賜されるという交易の側面を顕著に帯びていた。

当然、経由する弁韓にも必ずこのルートを通じて外来の物資が行き交い、流入したと考えなければならぬ。上述のように「諸韓国に詣る」と明記される通りである。金海の大成洞墳墓群や、少し時代を遡る良洞里の墳墓群で出土したような中国東北系の鏡・銅鏡などの文物が伝えられ、大型木槨墓が受容されたルートの一つでもあろう。最近注目を集める宮崎市櫛一号墳に認められるという木槨の知識などもこのルートを伝って導入されたのであろうか。

要するに、狗邪韓国の位置に絞っていえば、国内にはいくつかの拠点があり、倭と魏・帯方郡を媒介する内陸・海上の交通路の要衝であって、近くは韓の諸国と結ばれ、遠く隔てる中国東北・北方ユーラシアにも文化的系譜を辿り、多方面に通じる国際交流の基地と称して差し支えない。この諸韓国・首長間のネットワークの一大中心は、やがて4世紀以後、多重文化（鉄・陶質土器・甲冑・馬匹文化）を醸成し、東アジアの交流する諸民族集団（加耶人・新羅系加耶人・倭人など）の集散地となり、いわば広域流通圏（機構）の中心軸として展開を遂げる。これは弁韓（加耶）地域全体の歴史的特色でもあるとして、決して過言でない〔鈴木1993〕。

## 5 倭と韓の乱と王権

桓・靈の間、180年頃、倭国が乱れるという記事もよく知られている。これを鉄の流通と絡ませて倭の王権の形成の導因を理解する仮説的見解が考古学、文献史学の双方にあり、私も賛同してきた。これに対して、近年鉄器の存在を過大視するとして反駁し、続く古墳時代への移行過程を見直して、大和や近畿の主導性を否定する説がある〔村上2000〕。近畿では鉄器だけでなく、元来、前方後円墳の構成要素も存在せず、土地を提供するくらいであって、大和主導の議論は成り立たないとする問題提起である。

そこで、あらためてそうした異論をも念頭に置きつつ見通すなら、倭国の乱とはやはり鉄素材・鉄製品の輸入ルートをめぐる西日本の首長同士の争いに起因するものであろう。それまで楽浪郡や

諸韓国との交流によって社会の階層化を進めていた玄界灘沿岸部をはじめとする北部九州諸国の首長たち（例えば、交流により環壕集落の張り出しなどの設計プランを摂取したり、飲料用のジョッキ形土器を模倣したり、葬礼に際しての蓋弓帽〈馬車の天蓋の金属部品〉や金銅製飾り付き木棺などの葬具を贈与されるような人々）と、それに対抗して迫り、鉄などを入手・分配しようとする山陰、東部・西部・東部瀬戸内沿岸および近畿の後発的な社会の各首長の戦い（反乱）であると見なされる。つまり革新する社会と、それを引き戻し追い付こうとする後進社会とが抗争するいわゆる平等化現象を生じたのであり、人々の諸関係と社会の動きはジグザグに展開する。そして結局、戦いの収束によって西日本の社会総体として進化を見る。その結果、東部瀬戸内と近畿（大和）が優位性を獲得し、海外交流の窓口たる北部九州、瀬戸内などにおける鉄の物資流通拠点を掌握し、「供給」=交易関係を樹立する。同時に、鉄の流通と技術者の移住などをともなう鍛冶技術の移転、再分配・互酬性の実現を通して列島各地の首長層と人格的、政治的関係（ネットワーク）を形成するようになる。さらには流通機構掌握者の地位の継承と外交権・祭祀権の行使による特定集団の專業化、公職化によって倭王の王位・公権力を確立させ、持続へと導いたと概観できるのである。すなわちこれが乱後の邪馬台国を盟主とする倭国の形成である。

倭人伝に即していえば、倭国の乱は諸国首長による最高首長の卑弥呼・倭王の「共立」を結果としてもたらした。倭王は近畿（大和）にあったと思われる邪馬台国、すなわちヤマト国に都していた。諸国には「世々、王あり」とあるようにそれぞれ上位の首長がいた。しかし卑弥呼の死後、男王が立つが國中服さず、誅殺し合う。そこで卑弥呼の宗女、台与が立ってようやく定まるといふ。倭国の王位としばしば起こった乱の関係では、度々の戦いに際して振るわれたに違いない、霊魂を付着させて呪術能力をもつ女性首長という属性は重要である。だが、王が女性か否かが問われるのではなく、卑弥呼から台与へという継承に窺われるように、宗族、つまり一定の血族集団の血縁原理によって公的地位、それに付随する様々な物的、人的基礎が首長層間に重要視され、ひいては社会成員に承認されるというこの段階の性格をまず看取すべきであろう。

ところで、韓、特に弁韓南部でも同時期、金海の鳳凰洞などの高地性環壕集落、大成洞墳墓群などでの鉄錠の集中的出土、昌原・城山の製鉄遺跡、義昌での板状鉄製品の出土など、6世紀以降の新羅時代に降るが密陽・沙村（喙己吞）の大規模製鉄遺跡、加えて洛東江下流域の鉄鉞山の分布、金海の冶鉄にちなむ遺称地名を考え併せると、必ずしも入手の容易でない鉄をめぐる、覇権争いの起こった可能性が十分ある。例えば、『三国史記』列伝の居道伝に見える、脱解王代の居道が居漆国と于尸山国を攻略した説話を、于尸山国を蔚山地方に比定し、攻略の目的を鉄生産をめぐる争いを表すと解釈する説がある〔李賢恵 1998〕。

そうした諸国間の抗争の解決策として、辰王の推戴・出現があったのではないか。上にも見たが、辰王は第三者の立場として立てられた。その後もその地位は弁辰十二国の王でありながら馬韓人の継承によっていた。やはり特殊な血縁集団が重視されているが、これらは文化人類学でのいわゆる外来王のバリエーションとして理解できる。彼は自立できない王であるが、外交機能を発揮し、上位権力である中国の魏から官爵を授与され、その権威の下に再分配行為を続けることを通して独自の地位を維持しえたものと思われる。

おそらくこの時期の韓と倭の社会情勢は連動し、弁韓の鉄をめぐる争いが倭に大きく影響したの

であろう。そこには諸国首長層の再編・公権力の形成を見るという双方の共通項が認められる。ただし、倭の「共立」された卑弥呼の魏との外交と官爵の受容に比べて、韓では辰王の擁立、魏との外交による官爵の受容がなされるのは酷似するが、他方ですでに述べた通り、臣智以下と多数の下戸たちがそれぞれ主導する魏・帯方郡との朝貢、官爵の授与もあるという、複数系列の外交・交易活動の併存した点を著しい差異として指摘できる。

近畿に本拠を置く倭王権のありかたをいえば、倭国の乱を大きな画期とし、北部九州首長との関係の成立を必須の前提にして、弁韓（加耶）との交流・交易を開始した。そのことこそが、これ以後の金属資源と技術者（渡来人）を恒常的、独占的に受容し、管理・分配（配置）を繰り返すことによって倭各地の首長層との間の結合を保持するという、この王権のファンダメンタルズ（基本的性質）を強く規定するのである。

## ②……………加耶の発展と倭国

### 1 弁韓から加耶（加羅）へ

4世紀前半、韓では新羅・百済が成立し、中国王朝への朝貢外交が始まる。327年、馬韓諸国を統合した百済が、それ以前の馬韓（290年）に代わって百済を名乗り東晋に入朝する。377年、辰韓諸国を統合した新羅が前秦に入朝する。ともに国王号を冊封される。382年、新羅は前秦に朝鮮情勢と国号変更を告げている。

加耶（加羅）の呼称がいつ頃より開始されたかは、隣接する二国の動きと無関係でない。国際交流の活発化にともない、弁韓もまた漢風の二字表記を志向したであろう〔鈴木1992〕。弁辰条には、弁辰（弁韓）と辰韓の諸国では民族的、文化的、社会的類似性のすこぶる多いことが述べられる。民族集団の雑居、城郭、衣服、居処、言語、法俗などの類縁が挙げられている。ただし弁辰（弁韓）は辰韓と、鬼神を「祠祭」するのに異なることもあるとも記される。この「祠祭」の相違とは、逆に弁辰諸国間での共通の祭祀の存在したことを意味する。祭祀の内実がいかなるものか不明であるが、共同祭祀という紐帯によって、様々な政治集団が同盟を結び、普通その祭祀期間は同盟者の間では休戦する制度が存在するという文化人類学での祭祀同盟論〔岡田1977、大林1977〕に果たして当てはめることが可能であろうか。もしそうなら、加耶の諸国を取り結ぶ一大要素としての祭祀ネットワークの形成をも考えさせる。

弁辰条によると、弁辰○○、つまりそれぞれの地域・集団・諸国名に加耶（加羅・駕洛・加良）の字がプラスされる国名として共通性がある。この共通性は上記の社会や生活や文化の共通性が土台になっているのである。弁は字訓で国名の狗邪=갈 kalに起源を有する漢字一字の表記であり、加羅（加耶）は音の二字表記である。弁韓は狗邪韓国と同意であり、狗邪韓国が弁韓諸国の中心であることを如実に示すといえよう。弁辰というのはそれと区別される諸国を包括して表現する用法かも知れない。後の日本では字音を取って、加悦・加夜・賀陽などと、また訓により辛・韓などと記される。갈 kalの語源は不詳であるが、例えば갈 khalなら『訓蒙字会』に刀・耕具を意味するとあり現代朝鮮語でも刃物類をいうので、これら形状や目的を異にする道具名が同一であるのは、元来、鉄ないし金属を指すことに由来するかも知れない。

狗邪韓国の後に興った任那加羅の小地名が須奈羅（素奈羅）であったことは、『日本書紀』敏達四年・推古八年各条に明記される。周知の通り、現代朝鮮語でも 새 swe は鉄・金属類を意味し，나라 nara は国・土地を意味するので，すなわち鉄や金属を産出する土地，鉄の特産地であった不動の証拠になる。さらにこの国のもう一つの呼称である金官（加羅）は，加羅王の系譜伝承に金官公を金国公とも記すので，金官が須奈羅の漢語への意識表記であることが推察できる。

しかしながらこの地域は広域流通機構センターであるが，再分配機能だけでは弁韓（加耶）諸国統合の中核たりえないことも事実である。これは加耶諸国のそれぞれに分散した多核的な再分配機能，均質な人や集団の分布，生産・文化の多彩なありかたが認められそうなことと関連する。結局，経済・流通・文化センターから強権的な政治・外交センターへ転換するだけの飛躍的な組織化・制度化を成し遂げる決定的条件が出揃わなかったのであろう。

加耶諸国の首長たちの戦争・同盟を含む軍事力量，外交手腕には盛衰があるに違いなく，交易・交流活動にも強く作用する。定型化した甲冑・馬具の生産・流通・配布，工人（技術）の移転などをリードする中心軸の移動が起り，5世紀以後，加耶南部の任那加羅から北部加耶の大加耶（伴跋）へとという形で表面化する。

## 2 高句麗・百濟戦争と倭と加耶

4世紀半ば過ぎの加耶にかかわる朝鮮半島と倭の情勢を物語るのは，奈良県石上神宮所蔵の七支刀とその銘文である。七支刀は369年（泰和四年）に製作された呪刀を百濟王の世子が倭王の贈った旨が刻まれている。それは『三国史記』によると，369年，現在のソウル付近で高句麗故国原王と百濟王の太子仇首の両軍が激戦，371年，再戦して高句麗王は戦死し，勝利を収めた百濟が漢山に遷都する事件と関係する。372年，百濟は戦勝の余勢をかって東晋に入朝し，国交を樹立する。この東晋―百濟関係をもとにして，やがて倭とも連絡して東アジア世界での一方の国際体制のラインが形成される。

『日本書紀』神功皇后四十六年条に引く「百濟記」は己巳年の事件として，倭の干渉の下に「任那」の成立と解されうる説話を伝える。これらは百濟が高句麗の大侵略に遭い，逆に百濟王と太子の兵が高句麗を侵略し，王を戦死させるが，その戦争に倭が助勢したことを意味する。さらに戦後，百濟は倭に「七支刀・七子鏡・種々の重宝」を「献上」し，国西の水を飲み，水源の谷那鉄山の鉄を取って永久の奉仕を誓ったとする朝貢起源説話が掲げられる。

谷那鉄山がどこかは議論があるが，鉄の獲得・朝貢が倭と百濟の関係の目的であるとする歴史認識が『日本書紀』に反映している。実際，この時，百濟王が鉄鋌を倭の使者に託している。これも説話的であるが，二国をつなぐ鉄の存在はきわめて象徴的である。

高句麗・百濟戦争に当たって，倭が百濟に荷担したのは，倭の王権にとって初の対外戦争への参加でもあった。そして弁韓（加耶）の仲介が考えられる。以前から首長間の交流があり，『日本書紀』の記事にも片鱗が窺われる卓淳国（昌原）か，倭とより密接な狗邪韓国（金官）の誘いによって，百濟との王権間の関係が成立したものと思われる。4世紀前半に遡る加耶地域での倭系遺物の分布はこうした倭の動きと無縁ではないであろう。結局，倭の王権の意図は，鉄をめぐる朝鮮半島情勢への参入を実現すること，その上，広角的な交易・交流策から，すでに閉ざされた楽浪・帯方

ルートに代わる遼東・中国ルートの回復を目指すことにあったのであろう。なお、このほかに加耶諸国の動脈でもある洛東江と鳥嶺を越えて漢江をつなぎ、北上する内陸の水系ルートの存在も想定されている [李成市 2002]。

倭がこの戦争に参加し、百済との関係を強固にしたことの意味は、王権の確立にとっても絶大なものであった。倭王権は列島各地首長層とその下の兵士の動員・結集を行って、近畿首長層を核とする列島規模の統一的な軍事・外交・交易権の掌握を可能にし、しかも加耶・百済を介しての東アジア国際政治へのデビューが、上記の東晋—百済—倭という国際体制と交流ルートの構築につながり、この基本線は倭王権の外交に後々まで受け継がれるのである。

### 3 倭の高句麗との十七年戦争

高句麗広開土王（好太王）碑文には、391年（辛卯年）から407年（永樂七年）にかけての高句麗の広開土王の勲績、とくに周囲との戦争記事を詳述する [鈴木 2002b]。

そこには倭が新羅に進駐し、百済と友好関係を結び、加耶の任那加羅・安羅と提携し、高句麗に対抗し続ける仇敵としてしばしば登場する。すなわち399年、新羅は倭の侵略を高句麗に訴え、翌400年、高句麗軍は新羅城（慶州）を占領する倭を退け、任那加羅の従拔城まで追撃して降伏させる。任那加羅も当然、倭に同調していたに違いない。それと同時に、安羅人の守備兵も新羅城などを攻めるが、倭は敗北する。その後も、倭と安羅は高句麗と激戦するが大破される。百済も高句麗との誓約に違って、倭に荷担する。404年、407年と百済は高句麗と戦うが惨敗を喫した。この時の戦争にも倭が参加した可能性がある。

高句麗は新羅をはじめとする近隣諸国・諸地域と朝貢・論事関係を取り結び、高句麗本位の国際秩序の形成を目指したのである。この碑文に見えるのは南部加耶の二国、任那加羅（金官）と安羅である。前者は倭と結んで高句麗に対峙し、後者も倭と共同の軍事行動を取っている。

二国はともに倭・百済との提携策を実行している。これは4世紀半ば過ぎの国際路線の延長線上にあると理解される。北部加耶の大加耶も倭と交流を持つようになっていたが、南下して迫り来る高句麗に近接する国際環境が南部加耶とは違った立場を取らせたのであろう。

倭とは一貫した外交策に見られるように、倭王と王権の指揮・編成に基づき、各地首長に率いられて出兵した軍事集団であろう。倭は加耶・百済の誘いに応じて、長年にわたって強敵高句麗に挑み続けたが、敗北したのである。倭の王権が高句麗との戦争を遂行したのは、加耶などとの首長間の友好関係のためという単純な事情によるものでない。碑文はあいにくその性格上細部を語らない。しかし倭の王権にとっては鉄・鉄製品、それに経済的物資、技術、イデオロギーをも含む先進文化の流通・交易ルートを確保するための戦争であり、この点で加耶などと利害を共有したのである。高句麗との戦争が、武器・武具・馬具製作のために鉄の需要を一層増大させたことももちろんである。近畿などの古墳で出土する加耶製と見なされる鉄鋌は、被葬者である首長たちが王権の下にあって、加耶との格別な交流、高句麗戦争への出兵に当たった象徴的な痕跡である。倭王権は加耶などからもたらされた鉄製品に対して人と特産の物資を見返りとしたのではないか。人とは兵士の動員、つまり兵力の提供かと想像される。金海を主とする加耶地域から出土する倭系遺物、碧玉製品・巴形銅器・筒形銅器などはその紛れもない証跡である。戦争後、新羅の高句麗への従属が進む。

その新羅の影響を加耶が受ける。また加耶・百済に対する高句麗文化・高句麗人の進出もあることは、『三国史記』などよりも該地域の4・5世紀の交の発掘的調査の成果が明示するところである。

加耶では、任那加羅において5世紀初め以降、大成洞墳墓群の衰退に典型的に見られる社会と権力構造の変化を生じる。政治集団の移住・吸収が各地で起こったであろう。

倭においても敗戦を契機として王権内の何らかの権力交替があったらしい。その結果、倭王権はそれまでの大和に加えて、河内に進出・拡大し、おそらく両方で政治・流通・文化センターを設定するのである。

倭では、たとえ権力交替があったにしても、加耶・百済を重視する国際路線を終始変更せず継承していることが注目される。

#### 4 倭と宋の外交と加耶

『宋書』倭国伝には、421年（永初二年）から478年（昇明二年）まで、五人の倭王が相ついで宋との外交を続けて、朝貢と官爵自称を行い、冊封による除正の要求を繰り返したことが知られる。

倭王たちが宋および東アジアの国際社会での承認を求めたのは、「倭国王」号と併せて倭と百済・新羅など朝鮮半島諸国の軍事支配を合意する「使持節・都督・○○諸軍事」の軍号である。そのなかで、421年はつまびらかでないが、438年には「任那」、451年には「任那・加羅」、478年には「任那・加羅」がそれぞれ含まれる。加羅とは北部加羅の大加耶（伴跋）である。475年の高句麗の攻撃による百済の漢城陥落、熊津遷都、高句麗の領域拡大・南下が進行し、北部加耶諸国が結集した。479年（建元元年）、加羅王荷知が南斉に朝貢し、輔国將軍加羅国王に封じられているのは、その活路を中国王朝との連携に探る動きであると解釈される（『南斉書』加羅伝）。大加耶（伴跋）を主とする政治的、軍事的結集の実態については、多面的な検討がなされ、大規模墳墓をもつ高霊（伴跋）を中心にして周囲に独特の土器が分布すること、加羅王荷知が大加耶の嘉悉（嘉実）王（『三国史記』）に当たること、などを根拠にして近隣諸国にかなりの広がりもったと推測する考えが強い。倭の王権は溯って442年頃以来、伴跋進出を意図していた。

この任那とは倭に最も近く交流の緊密な南部加耶の任那加羅（金官）のことである。これら二国はともに反高句麗の旗幟を掲げて、新羅とも政治的に一線を画する。倭は南北加耶で連携する二つの盟主との関係を重視し、軍号に名乗ることで国際社会に向けて関係の深さをアピールしようと思図したのであろう。これらの政治・外交上のつながりの背景となる、現実の様々な交易・交流の形跡は考古遺物から論証されることである〔朴天秀1998〕。こうして倭王権ないしその下の勢力は、加耶との交流と同時に、高句麗への対抗、百済との友好ないし同盟関係に基づき、その誘いに応えながら軍事行動を取った。

『日本書紀』の雄略紀以下の検討から何度かの出兵は否定しがたい。また百済の東城王の例のように、即位に関与する出兵もあった。だがそれは間歇的で特定の地域と住民に対する生産物の貢納や労役の徴発といった支配の実態とは、別次元のものであるといわなければならない〔鈴木1984〕。

要するに、倭にとって百済の危機はすなわち加耶の危機以外の何ものでもなく、そうした情勢は倭に直ちに伝達される国際的な関係、交流、流通のネットワークがいくつも存在したのである。その関係の根底にあるのは倭王権が独占すべき鉄原料、先進技術・技術者の確保にほかならない。こ

ここに倭王権が多元外交を図り、なかんずく加耶との交流を維持すべき必然性があった。

5世紀末から6世紀初めにかけての頃、日本列島ではようやく鉄精錬の可能になる体制が整ったことが明らかにされている。これが倭と加耶との関係はもとより、加耶と新羅の関係、ひいては東アジア世界の諸関係にも大きな変化を生じさせる要因の一つとなったものと見通される。

## 結びにかえて— 6世紀の加耶の滅亡

532年、任那加耶（金官）は、それ以前より文化侵蝕を受けていた新羅に攻められ、滅ぼされる。545年頃、倭とも関係の深かった安羅が滅ぶ。562年には、北部加耶で勢力を守っていた大加耶（伴跋）が新羅に滅ぼされて、加耶は遂に姿を消す。

上記の通り加耶諸国は連盟を結んでいたとされ、ことに新羅琴に受け継がれる加耶琴の十二曲が実は加耶諸国の名にちなむことに着目し、大加耶を盟主として洛東江と蟾津江の間の下流域一帯に政治的、文化的な連盟の形成があったと推定する説があり〔田中1992〕、留意される。

『日本書紀』欽明二年（541）・四年（544）条に見える泗沘で開かれた「任那復興会議」の記事は、滅亡に瀕する段階での加耶諸国の首長層（早岐）が複雑をきわめる外圧に抗して、その打開を図るために政治結集する事実を物語る。かつては倭と反高句麗の共同戦線を取ることもあった新羅の外交戦略は、520年代以降、大加耶や百済の反発を招き、脅威にさえなっていた。そうした国際環境の変化のなかで、百済が主宰して加耶諸国の政治首長である早岐層同士の国際的な外交会議がもたれた様子を描くものである。そこには加耶諸国間での格差があるものの、階層分化（安羅・加羅・多羅）、首長位の世襲化（散半奚・斯二岐）、官僚化（安羅・加羅・多羅）によりそれぞれが政治身分制、政治的社会的進展を見せていることを知ることができる。

近年の昌寧・桂城墳墓群に代表される甕棺・土器などに「大干」などとヘラ書きされた出土文字資料を見ても、加耶の早岐（干支）が身分上昇を遂げつつあることが分かる。およそ首長層については干支から大干、大干の漢風表記としての大王へという首長層称呼の変化の過程を追うことができる。六世紀前半の高霊（大加耶）タイプの長頸壺およびその蓋（忠南大学博物館所蔵）に刻まれた「大王」の二文字は、加耶を取り巻く高句麗や新羅、そして倭でも使われている最高首長の尊称であり、この国際環境に対する加耶人の認識とも無関係であったとは思われない。今後、加耶滅亡前後において、これらの動きの背後にある加耶の内外での交易をはじめとする経済的、社会的変化を窺わせる、より直接的な史・資料の析出、検討が必要であろう。

### 註

(1)——カトリギヌは『魏志』倭人伝にも、倭の産物として鎌が挙げられ、243年（正始四年）、倭王から魏に贈った朝貢品の一部に絳青鎌と見える絹織物の原料であり、これらの両者に共通する絹布製品を媒介にして、弁韓と倭の交流も推定できる。

(2)——2002年、長崎県芦辺町・原の辻遺跡（壱岐島）の多重環壕集落中央部で出土した弥生時代後期、1～3

世紀の銅製権は後漢または楽浪で鑄造された棹秤用の重りであるが、この種の権は『魏志』倭人伝にいう一支の「南北市糶」に使われた可能性が濃い。したがって一支における市と交易を具体的に裏付ける物証となりうるが、同遺跡ではこれまでに外来の無文土器、五銖銭、三翼鏃、楽浪系土器を出土し、船着き場も確認されており、対外交易の拠点であったと見られている。交易に関する度量

銜については、韓国義昌の茶戸里遺跡1号木棺墓で筆記 韓国での対応する類例として注意される。  
具とともに重りが発見されており、前1世紀後半の狗邪

---

## 引用文献

---

- 東 潮 1999 『古代東アジアの鉄と倭』 汲古社  
 大林太良 1977 『邪馬台国』 中公新書  
 岡田英弘 1977 『倭国』 中公新書  
 佐々木稔編 2002 『鉄と銅の生産の歴史』 雄山閣  
 鈴木靖民 1984 「東アジア諸民族の国家形成と大和王権」『講座日本歴史』1 東京大学出版会  
 —— 1992 「加耶に関する一・二の問題」『東アジアの古代文化』73  
 —— 1993 「加耶史の展開と倭」『巨大古墳と伽耶文化』 角川書店  
 —— 1995 「加耶の鉄と倭王権についての歴史的パースペクティブ」『日本古代国家の展開』上 門脇禎二編 思文閣出版  
 —— 2002a 「三～四世紀 倭王権の生成・展開と加耶」『伝統と創造の人文科学』 國學院大學大学院  
 —— 2002b 「倭国と東アジア」『倭国と東アジア』鈴木靖民編 吉川弘文館  
 孫明助 1998 「韓半島中・南部地方鉄器生産遺蹟の現状」『嶺南考古学』22  
 —— 2003 「加耶の鉄」『東アジアの古代文化』114  
 武末純一 1994 「弥生中期の人々と文字」『西日本文化』300  
 田中俊明 1992 『大加耶連盟の興亡と「任那」』 吉川弘文館  
 花田勝広 2002 『古代の鉄生産と渡来人』 雄山閣  
 朴天秀 1998 「考古学から見た古代の韓・日交渉」『青丘学術論集』12 韓国文化研究振興財団  
 前川啓治 1998 「周辺社会と外部社会の接合」『周辺民族の現在』清水昭俊編 世界思想社  
 村上恭通 2000 「鉄と社会変革をめぐる諸問題」『鉄器生産・流通と社会変革』『古墳時代像を見直す』 青木書店  
 李成市 2001 「東アジア世界の三韓と倭」『シンポジウム邪馬台国が見えた』平野邦雄ほか監修 学生社  
 —— 2002 「新羅の国家形成と加耶」『倭国と東アジア』鈴木靖民編 吉川弘文館  
 李賢恵 1998 『古代韓国の生産と交易』 一潮閣

(國學院大學文学部)

(2003年4月1日受理, 2003年7月18日審査終了)

## 문헌으로 본 加耶와 倭의 철

鈴木靖民

『魏志』韓傳의 「魏略」에 의하면 1世紀後半, 辰韓에서 採木노동에 종사하는 漢人의 설화는 鐵의 채굴·鍛冶생산을 시사하고 있다. 덧붙여서, 3世紀의 韓에서는 首長層 외에, 다수의 주민인 下戶들에 의한 魏와의 다원적 교역이 행해졌다. 弁辰에서는 鐵을 생산하여 韓·濊·倭가 취하고, 또 樂浪·帶方二郡에 공급했지만, 교역에는, 외교·군사상의 의미도 있어 鐵加工技術이나 소비처를 확보할 수 있는 公權力이나 首長層이 관여했다. 倭의 교역주체는 倭王이나 首長이었지만, 실제로 담당했던 사람은 倭人傳에 보이는 對馬·一支의 「배를 타 남북으로 市糶한다」는 교역집단과 同類이다.

이 철의 收取과 재분배·互酬에 의해 弁韓中樞의 狗邪韓國(任那加羅)의 首長層이 諸韓國의 네트워킹을 만들고, 더 나아가 유통기구센터화하여, 4世紀이후도 철을 시작으로 하여, 陶質土器·甲冑·馬匹등의 다채로운 문화와, 諸民族集團이 서로 오고가는 동아시아유수의 광지역유통의 중심지로서 전개되었다.

2世紀末경의 倭國의 亂은 鐵素材·鐵製品의 수입루트를 둘러싼 西日本の 首長간의 싸움이였다. 樂浪이나 諸韓國과의 교류에 의해 사회의 계층화를 진행시키는 北部九州의 首長들에 대한, 山陰·瀬戶內沿岸·近畿의 후발적 사회의 수장싸움으로, 그 결과 後者가 鐵의 유통과 기술이전을 통해 우위에 섰다. 이렇게 성립된 倭國왕권은 鐵·金屬資源과 渡來人의 수용·관리·분배의 재조정에 의해, 각지 首長層과의 결합이 유지되지만, 그것이 왕권의 기본을 강하게 규정하는 것이다. 같은 시기, 弁韓에서도 鐵의 입수를 둘러싸고 霸權싸움이 일어나, 항쟁의 해결책으로서, 外來王적인 辰王이 推戴되었다. 弁韓의 鐵을 둘러싼 싸움이 倭에게 영향을 끼쳤던 것일 것이다. 그 이후, 4世紀 후반부터 5世紀에 걸쳐, 韓半島에서의 전쟁을 포함한 정세하에 있어, 倭王權은 위기에 처하게 된 加耶·百濟에 가담하는 국제노선을 끊임없이 계승하게 된다. 그러나, 5世紀末6世紀初에 일본열도에서 鐵精鍊이 가능하게 되자, 倭와 加耶, 加耶와 新羅의 관계, 나아가서는 동아시아의 諸關係도 크게 변화하게 되는 것이다.

---

## The Iron Materials between Gaya and Wa Viewed from the Documents

SUZUKI, Yasutami

Legends contained in *WeiZhi* (魏志) from the latter half of the 1st century about Chinese laborers engaged in procuring wood in *ChinHan* (辰韓) point to the extraction of iron and iron production. Then, in southern Korea during the 3rd century, in addition to the ruling class, the many residents who lived in small family units were engaged in pluralistic trade with *Wei*. Iron produced in *PyonJin* (弁辰) was taken by *Han* (韓), *Ye* (濊) and *Wa* (倭), and was also supplied to *NakLang* (樂浪) and *DaeBang* (帶方). This trade was also significant in diplomatic and military terms, and both the citizenry and the ruling class played a part in acquiring techniques for processing iron and sources of consumption. Although in *Wa* entities associated with the *Wa King* and the chiefs were involved in trade, according to the History of *Wa*, it appears that in fact it was groups of traders from Tsushima and Iki who took on this role.

It was through this acquisition, redistribution and payment for iron that the ruling class in the state of *Kuya* (狗邪), which lay at the center of *PyonHan* (弁韓), established networks in the various *Han* states and also set up distribution mechanisms. From the 4th century onwards, this region became the center for a diverse culture which included ceramic ware, helmets and armor and horses, as well as a base for a great sphere of distribution in East Asia through trade conducted by the various ethnic groups.

The disturbances in *Wa* around the end of the 2nd century were battles between chiefs in western Japan over import routes for iron materials and products. These battles were waged by chiefs in the less developed societies of San'in, the Setouchi coast and Kinki against the leaders in northern Kyushu, where society had adopted classes as a result of interaction with *NakLang* and the various *Han* states. The result was the rise to power of the former through iron distribution and the transfer of technology. The royal authority in *Wa* which was formed in this way maintained unions with the ruling class in each area through the repeated acceptance, control and allocation of metal resources and visitors from the Asian continent, and it was this that strongly prescribed the fundamental nature of this royal authority. At about the same time, a hegemonic struggle was taking place in *PyonHan* as well over the procurement of iron, and this dispute was solved by installing the King of *ChinHan*. This

struggle over iron in *PyonHan* is likely to have affected *Wa*. Then, from the second half of the 4th century through to the 5th century amid a variety of circumstances in the Korean Peninsula that included wars, *Wa*'s royalty was continually involved in taking over international routes with the support of *Gaya* (加耶) and *PaekChe* (百濟), which were themselves experiencing crises during that time. However, when in the late 5th century and the early 6th century iron refining became possible in the Japanese Archipelago, the relationship between *Wa* and *Gaya*, *Gaya* and *Silla* (新羅), and in turn relationships between the states of east Asia, underwent great change.